Osaka University Knowledge Archive

Title	拡がる世界、狭まる視界 : 適応方略の不合理性、不合理な心性の合理性
Author(s)	金政, 祐司; 相馬, 敏彦; 小塩, 真司 他
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5086
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

拡がる世界、狭まる視界

—適応方略の不合理性、不合理な心性の合理性—

金政祐司（追手門学院大学心理学部）
相馬敏彦（広島大学大学院社会科学研究科）
小塩真司（中部大学人文学部）
結城雅樹（北海道大学大学院文学研究科）
橋本　剛（静岡大学人文学部）

現代社会は絶え間なく拡張し続けているが、個人が生来的に有している心理的メカニズムまでが飛躍的に拡張するわけではないので、世界が拡張するほど個人が把握可能な相対的範囲は小さくなる。その結果、個人にとって世界の不明瞭感は高まり、さらに限られた視野の中での適応を優先する方略の促進に繋がり得る。さらに、それらの適応方略は限定的であるがゆえに、より広範な社会に種々のリスクをもたらす可能性も想定される。

本論文は、このような問題意識に基づく複数の研究プロジェクトの成果を紹介した学会ワークショップをまとめたものである。各発表者は、一見不適応的な心性が、実は今日の社会的状況で生きていくために有効な適応方略として機能している可能性、もしくは逆に適応的に見える方略が実は不適応的な帰結をもたらす可能性について議論する。最初の話題提供では、自己への拘りを目的化する「自己目的化」の心理について議論する。次に、自分たちの親密関係を絶対的に高く価値づけようとする心理、すなわち「特別観」について議論を展開する。さらに、「良いことしか見（え）ない」心理、すなわち「ポジティブ信奉」や「二分法的思考」について議論する。最後に指定討論では、社会生態学的アプローチの視点も含めつつ、「拡がる世界、狭まる視界」という現象の実証的検討のためには何が必要なのかについて議論を深める。

キーワード: 自己目的化、特別観、二分法的思考、ポジティブ信奉、社会生態学的アプローチ

企画の趣旨

橋本　剛（静岡大学人文学部）

現代社会はさまざまな形で拡張を続けており、価値観が多様化している一方で、それらの絶対性は喪失されています。このことは、サイバースペースの拡張、文化間交流の日常化などの、さまざまな局面で共通している現象ではないかと思われます。その一方で、個人が生来的にもっている情報処理能力や心理的メカニズムはどうかというと、そのような社会の変化に合わせて拡張しているわけではない、というのが現実です。

近年、そのような社会と個人のギャップにまつわる、さまざまな興味深い研究が展開されています。皆さんもよくご存じのところでは、例えばダンバー数(ダンバー, 2011)として指摘されている、いくらネットワークが広がったところで、本当に仲よくなれるのは 150 人か、せいぜい 200 人が限界だというような議論はその一例でしょう。また、invisible gorilla(見えないゴリラ)に関する研究をご存じの方も多いと思います。あることに選択的に注意を払っていると、不自然かつ明白な事情すら見逃してしまうようなことになる。この詳細は「錯覚の科学」(チャブリス・シモンズ, 2011)という本などで紹介されています。それから、「ジャムの法則」という話も、ご存じの方多いと思いますけど、選択肢が増えれば増えるほど、その中で選んでいくことが難しくなるという指摘もあります(アイエンガー, 2010)。このように、あらゆる形で興味深い研究が展開されているのですが、そこで共通して言えるのはどういうことかというと、世界が拡張することによって、どんどん不透明な部分が増大していっているという現実があるのということではないかと思います。

その結果として、可視範囲内での適応がどうしても優先される。それらの適応方略というのは限定的であるがゆえに、場合によっては、自分に見えていない、より広範囲の社会にさまざまなリスクをもたらす可能性も否定できないかと思います。資源の問題であるだとか、ウェブシステムにおける問題であるだとか、もしくは現代社会のモラルやマナーの問題、いずれも共通の構造をもっているのではないかと、独断的ながら考えております。そして、それらの問題の共通点を解きほぐしていくというのも、社会心理学に課せられた重大な課題の 1 つではないかと考えております。

そこで本日のワークショップは、そのような問題意識と関連する独自の切り口をおもちの先生方にご登壇いただいて、そのような現代人のある種の社会的心性、すなわち一見適応的、もしくは逆に一見不適応的に見える心性が、視点を変えれば逆の意味をもっているのではないか、というあたりに切り込んで、さらに、なぜそのようなことが起こっているのか、そしてそのような状況に対してわれわれはどのように対峙していけばいいのかということについて考えていければ、と思っております。

それでは本日の登壇者の先生をご紹介いたします。まず金政祐司先生(追手門学院大学)です。ご存じアタッチメント研究の第一人者ですが、近年「自己の拘り」を目的化する、いわば「自分しか見えていない心理」ということに関する研究をされており、そのあたりについてお話しいただきたいと思います。続きまして、広島大学の相馬敏彦先生に「特別観」ということで、恋愛関係において「自分たちだけしか見えない」ということについてお話しいただきたいと思います。さらに三番目に中部大学の小塩真司先生に、ポジティブ信奉、二分法的思考ということについて、このあたり小塩先生が従来ご専門とされている自己愛と関連するであろう、現代青年の「よいことしか見ようとしない心理」についてお話しいただきたいと思います。以上、3 先生に話題提供をお願いした後に、最後に指定評論者として、北海道大学の結城雅樹先生に、各先生の話題提供に対して、社会生態学的アプローチから切り込んだコメントをいただきたいと思っております。

そんなわけで、90 分間という短い時間ではありますがお付き合い願えればと思います。それでは私からの概要説明はそのくらいにして、金政先生、よろしくお願いします。

引用文献

Chabris, C., & Simons, D. (2010). *The invisible gorilla: And other ways our intuitions deceive us.* New York: Crown Publishers. (チャブリス, C.・シモンズ, D. 木村博江(訳) (2011). 錯覚の科学 文藝春秋)

Dunbar, R. (2010). *How many friends does one person need?: Dunbar's number and other evolutionary quirks.* Cambridge: Harvard University Press. (ダンバー, R. 藤井留美(訳) (2011). 友達の数は何人？ ―ダンバー数とつながりの進化心理学 インターシフト)

Iyengar, S. (2010). *The art of choosing.* New York: Twelve. (アイエンガー, S. 櫻井祐子(訳) (2010). 選択の科学 文藝春秋)

自己目的化と適応

―自己への拘泥は不適応を呼び起こすか？―

金政祐司（追手門学院大学心理学部）

私の発表は、自己への拘泥、もしくは自己に固執してしまうことは社会的な不適応を招くのではないのかということがテーマです。現在のように個人化が浸透した社会、かつ不確実性が増してさまざまな場面でリスクの制御、統制が不可能になった社会においては、皆がよいと信じることさえ行っておけば、もしくは社会的な規範から逸脱しなければ大丈夫という安心感がなくなってしまいました。すなわち、「これこそが社会のルールである」とか「これに従っておけば基本的には社会から外れない」といったある種の大きな価値観、大きな物語が瓦解し、価値観がたこつぼ化してしまったと言えます。そうなれば、それぞれのたこつぼ化した価値観の中で何が正しきものなのか、社会的に何が妥当とされるものなのかがよく分からなくなってしまうといった現象が起こり得ます。そのため、私たちは周りにいる他者の顔色を伺いながら、小集団におけるある種のルールみたいなものを自分なりになんとかして獲得しようとする。けれども、実はそのルール自体が結構集団のダイナミックスによってコロッと変わってしまうものなので、結局自分は何をすればいいのか、どう判断すればいいのかについての参照基準が不明瞭になり、自分自身についての確信がどうしても脆弱になっていってしまいます。

それはある意味で自由の代償というか、私たちが自由に行動することが可能になったためということもできます。例えば、一昔前なんかだったら、結婚しなきゃいけないよ、という社会的な圧力というか規範みたいなものがあったけれども、今だったら、そんなの個人の自由なんだから好きにすればいいじゃないかとなる。でも、ならば、どうすればいいのかっていうところの部分が、実質的に、各個々人の中でうまく構築することができず、折り合いをつけることが難しくなっているのではないかと思われます。

このように一般的にこれが正解という明確な答えというものがなくなって、価値観が多様化していくとすべての事象が選択の対象となっていく。例えば、何かを選択をするという事態において、A を取るか B を取るかっていうのも当然選択なのだけれども、選択をしない(A も B もどちらも取らない)というのも、まさに選択をしないという選択をしたということになってしまいます。つまり、何かを選択しないということも実は、その「選択をしない」という選択を自らが選んだということになる。例えば、就職するか、しないか、もしくは結婚するか、しないかといった事柄についても、本人は、自ら率先して、就職しない、もしくは結婚しないという選択肢を取ったわけではなく、ただ、なんとなくそうなってしまっていたとしても、それは、やはり、本人がそのような選択を下した、ということになるでしょう。

個人にとって、あらゆる事柄が選択の対象と化してしまうと、選択をする主体である自己もまた選択の対象となっていきます。そして、選択する主体であった自己が選択の対象と化してしまうと、選択という行為に対する個人の主体性が非常に脆弱にならざるを得なくなる。それと同時に、選択をしたことの結果や帰結に関しての責任は自分自身が肯わなければならず、そうなれば、結果的に重要な選択事項における決定はできる限り遅延されてしまう蓋然性が高まります。先の例に関して言えば、晩婚化なども、個人が結婚しないという選択を自らが率先して選び取ったわけではなく、ただなんとなく決断を遅延させていった結果が招いた現象として捉えることもできるでしょう。自由さゆえの不自由さと言えましょうか。

つまり、私たちは自由を獲得したのだけれども、その自由がよい帰結を導くのかというと、実は必ずしもそうではない状況であろうということです。自分が自由であるがゆえに、選択肢をいっぱいもってしまったがゆえに、その選択肢の多さが自分自身の首を絞める。特に、その選択が自分にとって非常に重要であった場合、今現段階において決定しなければならないはずのことが、考えれば考えるほどに、結果的に決断を先延ばしにしてしまう、もしくは選択をしないという手を打ってしまうことになります。

このように自己が選択の対象となると、自己に対して注視、拘泥し、私とはどういう人間なのか、私は何を欲し、何を求めているのか、また、私は私に関する事柄をどのように決定しようとしているのかについて再帰的に自己に問いかけていくことにつながります。つまり、自己が目的化していくということです。自分自身が、多数の選択肢の中から自分について選択しなきゃいけないのだけれども、自分に何ができるのかっていうことを本質的な部分で考え出すと、そのような問いを際限なくループ的に自己に

問いかけていくことになってしまう。「私とはどういう人間なのか」、「私は何を求め、何がしたいのか」、「私にしかできないことは何なのか」、「私にはどんな才能や可能性があるのか」といったほとんどアポリアに近い問題に捉われ、それらを再帰的に自己に問いかけていくループ・プロセスが構築されていくことになります。

そういうものって、ある種関係性の網目の中でしか答えが出ない、というかそもそも答えが出るかどうかさえかなり怪しい問題です。おそらく、私たちは関係性の網目の中で、私はあの人よりもこれができるのかなぁ、とか、もしくは何かをやりながらその答えっていうものをずっともち越したまま探していく。そうせざるを得ない。にもかかわらず、関係性をあまり考慮せずに、自身の思考に捉われ立ち止まった状態で、私とはどういう人間なのだろう、私には何ができるのだろう、と問い続けると、自己が目的化してしまう。

当然のことながら、人は未来を見通すことはできないので、自分は何をすればよいのかについて、確信的、絶対的な解答などというものはなく、そのため、私にしかできないことは何なのかとか、私にはどのような隠された才能があるのかについて反芻的に思考することに固執してしまうと、社会的に不適応な状態に陥ってしまうのではないのか。つまり、自分に拘り、捉われて自分を目的化してしまうことは社会的な不適応につながるであろうということが今回の研究のテーマです。

では、自己が目的化した場合、どのようなことが考えられるのか。つまり、自己目的化にはどのような側面が見受けられるのか、についてですが、先ほどの話のように参照の基準が不明瞭で、かつ、決断や投資の責任に関しては自分自身が背負わなければいけないような状況になると、際限なく決断を遅延させていくか、自分の決断の責任を他者に帰属させるか、あるいは、手短に利益や快楽を獲得できる選択肢を取るか、といったプロセスが優勢になると想定されます。つまり、選択の参照基準が不明瞭で、その責任は自身が取らなければいけない場合、決断をしない、もしくはできなくなる、また、決断の責任を自己が取らないで他者に押しつけてしまう、さらに、投資したことに対して即座に効果を求めすぐさま利益や快楽が獲得できるような短絡的な選択肢を取らざるを得なくなってしまうと考えられます。

そのため、自己目的化には以下の3つの側面、あるいは特徴といったものが見受けられると考えられます(Table 1)。1 つ目は、自己希薄化です。自分を希薄化、不在化させてしまって、他者が自分を理解してくれないという焦燥感を募らせる側面です。もう 1 つが自己高揚化で、自分というものに過度に焦点を当てるがゆえに、自身の能力を過大に評価して現在の自分自身の評価を不当に感じる側面です。最後の1つが自己利益希求化というもので、自分自身の利益に敏感になり、自分のやりたいことしかやりたくないといった傾向を示す側面です。自己目的化にはそれら 3 つの側面を想定することができます。

そのような自己目的化の 3 側面を測定する尺度、自己目的化尺度を作成するための調査を行い、自己目的化と社会的な適応性との関連について検討するというのが第一調査の目的です。そのため、4 大学で心理学関係の講義を受講している学生を対象に調査を行いました。分析の対象者は、347 名です。

まず、自己目的化尺度に関してですが、自己目的化の3側面を測定するために各側面に対応すると考えられる項目を書籍などから収集し、調査で得られたデータに関して因子分析を行った結果、想定された 3 つの因子を抽出することができました。その結果がお手元の資料にあります(因子分析の結果抽出された 3 因子の代表項目を Table 2 に示した)。

自己目的化尺度は 5 件法で取っているのですが、自己希薄化という自分が今にも消えてしまいそうとか、自分が透明な存在なのではないかと不安になるといった項目

Table 1　自己目的化の 3 側面とそれらの特徴

自己目的化の3側面	特徴
自己希薄化	自己に過度に注視してしまうがゆえに自己を希薄化・不在化させてしまうという側面。自身が誰からも必要とされていないような感覚や他者は自分のことを理解してくれていないのではないかという焦燥感を募らせる。
自己高揚化	自己に対して過度に焦点を当てるがゆえ、自身の能力を過大に評価する側面。現在の自分自身の評価を不当に感じる、もしくは社会的承認を過度に希求する傾向がある。
自己利益希求化	自己への過度の焦点化によって、自身の利得に対して非常に敏感になってしまう側面。自分のやりたいことしかしたくない、報われるかどうか不明確な努力は回避したいといった傾向を示す。

Table 2　自己目的化尺度の項目例とその平均

自己目的化尺度の3側面	項目例	平均（標準偏差）
自己希薄化	私は誰からも必要とされていないのではないかと思うことがある 自分が今にも消えてしまいそうになることがある 私は時々自分が透明な存在なのではないかと不安になる	3.11 (0.74)
自己高揚化	私が何かうまくいかないのは、周りの人たちが私の能力を見くびっているせいだと思う 他の人たちはもっと私のことを評価すべきだと思う 私はもっと社会から認められても良い存在だと思う	2.30 (0.65)
自己利益希求化	私は自分のやりたいことしかやりたくない 報われるかどうかわからない努力はしたくない 少しの努力で最大限の利益を獲得したい	3.01 (0.65)

に対する反応が、平均を取ると中央値の 3 以上になっていました。また、自己利益希求化もこのような項目なのですが(Table 2)、この平均値も中央値である 3 を超えていて、個人的な感想なのですが、それらの得点は思っていた以上に高いという印象です。

その他調査で用いた尺度としては、「主観的幸福感尺度」(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)、「GHQ12」(精神的健康の測定尺度; 中川・大坊, 1996)、「他者軽視(仮想的有能感)尺度」(Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004)、「日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙」(安藤・曽我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999)、「一般他者版愛着尺度」(青年・成人期の愛着スタイルの測定尺度; 中尾・加藤, 2004)などでした。

まず、自己目的化と主観的幸福感や精神的健康といった個人的適応との関連を見ますと、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化はすべて主観的幸福感とは有意な負の相関関係を示していました。自分が消えてしまいそうだといった自己希薄化が主観的幸福感と負の関連を示すのは比較的わかりやすいと思うのですが、他者からより高い評価を受けたいという自己高揚化や自分のやりたいことしかやりたくないといった自己利益希求化も主観的な幸福感を引き下げる傾向がありました。また、精神的健康に関しても、自己希薄化が高まると精神的健康状態は悪くなる傾向がみられました。

次に、自己目的化と攻撃性や他者軽視傾向といった対人的適応性との関連について検討した結果ですが、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化はすべて攻撃性と有意な正の相関関係がみられました。同様に、他者軽視傾向との関連についても、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化はすべて他者軽視傾向と有意な正の相関関係を示していました。自己高揚化と他者軽視傾向は概念的に近しい部分もあるので、それらの間に正の相関がみられたのは合点がいきますが、自分が消えてしまいそうと思っている、また、自分がやりたいことしかやりたくないと思っているほど、他者を軽視する傾向があるということも同時に示されており、先の攻撃性との結果を合わせると、自己を目的化することは対人的適応性を下げるということができると思います。

自己目的化と社会的な適応との関連についてまとめますと、自己目的化の 3 側面はすべて主観的幸福感と有意な負の関連を示していますし、また攻撃性や他者軽視傾向といった対人的適応性のネガティブさとも有意な正の相関を示していました。つまり、これらの結果は自己目的化の社会的な不適応さを示唆するものと言えます。

次に、不安定な愛着、すなわち、幼児期の親子関係において培われたであろう愛着のスタイルが、自己目的化を促進させ、その結果として適応性を損ねるのかもしれないというモデルについて検討を行いました。まず、自己目的化と愛着の二次元との相関を見ますと、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化はすべて関係不安と有意な正の相関を示し、また、自己希薄化は親密性回避と有意な正の相関を示していました。これらの結果に関しても、やはり自己目的化は愛着の不安定性と正に関連していることからその不適応性を伺わせています。

個人的適応に関して、つまり幸福感と精神的健康に関して、愛着の 2 次元が自己目的化の各 3 側面を媒介してそれらの適応性に影響を与えるというモデルについて検討を行いました(Figure 1)。その結果、関係不安から主観的幸福感への影響は、自己希薄化によって媒介されていることが示されました。つまり、愛着次元の関係不安が高ければ高いほど、自己は希薄化し、その結果、主観的幸福感が低くなっていました。また、精神的健康に関しても、関係不安から精神的健康への影響は自己希薄化を媒介させることでかなり低まることが示されました。つまり、対人関係において相手から見捨てられることに不安を感じるほど、自己を希薄化させやすく、その結果として、幸福感を経験しにくい、もしくは精神的な健康状態が悪くなるということが示唆されました。

さらに、対人的適応、攻撃性や他者軽視傾向に関して、愛着の 2 次元が自己目的化の各 3 側面を媒介してそれらの適応性に影響を与えるというモデルについて検討を行いました(Figure 1)。その結果、関係不安から攻撃性ならびに他者軽視傾向の両対人的適応への影響は、自己希薄化によって媒介されていることが示されました。つまり、対人関係において不安を感じているほど、自己を希薄化させる傾向にあり、その結果、他者への攻撃性が増す、もしくは他者を軽視する傾向が高まることが示唆されました。加えて、自己高揚化や自己利益希求化に関しても、関係不安から他者軽視傾向への影響を媒介するという結果が得られていました。

これらの結果をまとめますと、愛着次元の関係不安は自己希薄化を媒介して個人的適応や対人的適応を下げる傾向があると言えます。特に対人的適応に関して言えば、対人関係に対して不安を抱くことによって、その不安が自己を希薄化させる、いわば、自己を引き下げることへとつながります。そして、その自己を引き下げることが、他者に対して攻撃的になる、もしくは他者を軽視するといったように他者をも引き下げることへとつながっていく。これらの結果は、1 つの解釈ではありますが、おそらく視点ずらし、軸ずらしによって自分自身の適応性を確保していることを示唆するものではないかと考えられます。つまり、自己を希薄化させることは、先に述べたように不適応を招きます。そして、その不適応を抱えたまま、何とか自身の適応性を確保しようとするにはどのようすればよいかというと、1 つの戦略として、自分を引き下げると同時に他人をも引き下げることが考えられます。そうすれば相対的に見て、自分だけが引き下げられたことにはならないので、自らの適応性をかろうじて維持することができるはずです。先の結果はこのようなプロセスが示されたものではないかと推察されます。

次の第二調査では、上記の調査で自己目的化が愛着スタイルと関連していたことから、自己目的化と母親の養育態度との関連について検討を行いました。また、自己目的化は本人の適応性への評価だけではなく、他者からの評価においても不適応なところが見受けられるのではないかということについて検討するため、友人関係のペア調査を行うこととしました。

友人関係のペア調査ですが、大学の講義内で参加者を募り、108 組の親密な友人のペアデータを収集しました。調査項目は、先の調査で作成した「自己目的化尺度」、「母親の養育態度認知尺度」(長谷川・浦・田中, 1998)、「関係における他者からの認知尺度」(Kanemasa, Taniguchi, Ishimori, & Daibo, 2004)です。

まず、自己目的化と本人が認知する母親の養育態度との関連ですが、「母親の養育態度認知尺度」は、16 歳までに母親からどのような養育を受けたと本人が認知しているかを測定するもので、ケア(愛情)と過保護の 2 側面があります。それら母親の養育態度の 2 側面と自己目的化との関連を見ると、自己希薄化と自己高揚化は母親から愛情をもって育てられたというケアと有意な負の相関を示していました。また、自己希薄化、自己高揚化、自己利益希求化の 3 側面はすべて過保護と有意な正の相関を示していました。つまり、母親から束縛された、もしくは子ども扱いされたといった過保護的な養育を受けたと本人が認知しているほど、自己目的化傾向が高まることが示唆されたと言えます。

また、「関係における他者からの認知尺度」は、ペアの友人の印象について尋ねたものです。収集したデータがペアデータであることから、本人の回答した自己目的化の得点とペアの友人が回答した本人についての印象の得点との間の関連について相関分析を行いました。その結果、全体的にそれほど強い関連はみられていないのですが、自己希薄化は社交性および自信と有意な負の相関関係が、また、自己高揚化は社交性、人柄の良さ、責任・真面目さと有意な負の関連がみられました。つまり、自己希薄化が強くなれば、友人から社交性が低い、もしくは自信がないと見なされ、また、自己高揚化が強くなると、友人から社交性や人柄、責任感についてあまり評価されていないという傾向がみられました。ただ、それらの関連は有意ではあるもののそれほど強くはないので、自己目的化というのは、ある意味で個人内の調節機能なのかもしれないとも思っています。上記の結果をまとめますと、母親からケアや愛情を受けなかった、もしくは過保護な養育を受けたという認知は自己目的化を促進させ、また、自己希薄化や自己高揚化は友人関係における適応性を低下させるように機能する可能性があると言えます。

今回の発表の全体的なまとめですが、2 つの調査結果から、自分に拘り、

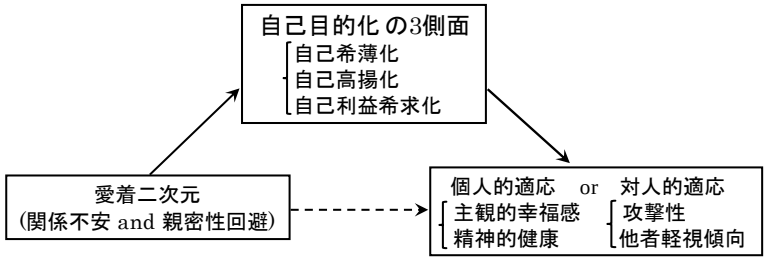

Figure 1 愛着二次元が自己目的化の 3 側面を媒介して
個人的適応もしくは対人的適応に影響を及ぼすとするモデル

捉われる、自己へ拘泥するという自己目的化は個人的もしくは対人的な不適応につながる可能性が高いということ示唆されました。ただし、2 つの調査に関してはまだ分析過程であり、また、今後さらなる調査の必要性もあります。今後の展開としては、自己目的化とアイデンティティの確立や孤独感との関連、もしくは就業や社会との関わり方への動機づけや将来展望との関連について検討していく必要があると考えております。以上で発表を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

引用文献

安藤明人・曽我祥子・ 山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999). 日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.

長谷川孝治・浦 光博・田中秀樹 (1998). 養育態度に関する親と子どもの認知が子どもの自尊心に与える影響. 日本社会心理学会第 39 回大会発表論文集, 44-45.

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福観尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.

Kanemasa, Y., Taniguchi, J., Ishimori, M., & Daibo, I. (2004). Love styles and romantic love experiences in Japan. *Social Behavior and Personality,* **32**, 265-281.

中川秦彬・大坊郁夫 (1996). 日本語 GHQ 精神的健康調査票手引き. 日本語 GHQ の短縮版: 解説 (pp.117-147). 日本文化科学社.

中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.

「かけがえはない」けれども、掛け替えはある？

相馬敏彦（広島大学大学院社会科学研究科）

「広がる世界、狭まる視界」ということで、金政先生は自己の観点からお話しされましたが、私は親密な対人関係において視界が狭まるという現象について話したいと思います。

親密な関係の当事者たちは、自分たちの関係にのめり込むあまり、ほかに代わりとなるような関係との比較であったりその精査をしたりすることなく、今コミットした関係というものは代替不可能なものだ、と思うことがあるという話です。このことについては社会学や哲学の中でも論じられ、そのこと自体が何かしらの適応的な意味をもつだろうということも指摘されてきました(e.g., 浅見, 2001; 筒井, 2008)。心理学の中でも同様の研究はいくつかあります。

この一方で、社会的交換理論を主とする枠組みでは、「代替可能な関係があるかどうか」を当事者はある程度精査した上で、関係にコミットするのかどうかを決める、という前提のもと議論が展開されてきました。例えば社会的交換理論を親密関係でのコミットメントの説明にあてはめた研究として投資モデルがあります(Rusbult, 1983)。その中では、代替関係の質の高さ、つまりほかに移ることのできる関係があるかどうか、によって現在の関係に対するコミットメントを高めたり低めたりするとされています。暗に、人は代替となるものをじっと見極め行動することが前提になってきたわけです。これに対して私は、必ずしもそうでないこともあると考えたわけです。

ではかけがえのなさというものはいったい、当事者に何をもたらすのか？相手との関係をかけがえのないものだと感じることで当の本人たちは幸せになるのか、不幸になるのか？この問題を考えてみようとしたわけです。

ここでは、かけがえのなさをこのように定義しました。特定の関係に所属している者が自分のもっているネットワークの中でも、その関係の価値だけを絶対的に高く価値づける、ということです。これを「特別観」と定義した上で、特別観が当事者にとってどのような意味をもつのかを考えてみました。特別視することが当事者にとって適応的なのかどうか？影響するとすれば、それはいかなるプロセスなのかということです。

なお、特別観が親密な関係の特徴であるということは、例えば友人関係でよりも恋愛関係に対して強いとか、配偶者関係に対して強いことを示す予備的なデータにて確認しております。これらの結果は、かけがえのなさというものが親密関係の主たる特徴であるという哲学など異分野の議論とも整合的です。

これまでに行った研究がいくつかありますが、ここでは2 つのデータセットを用いた分析結果について報告します。まず 1 つが、主婦の方を対象とする横断データです(相馬, 2009; Souma, 2010)。もう 1 つが、女性を大半とする社会人中心で約半年の間隔をおいたパネル調査・データです(相馬・浦, 2010)。かけがえのなさ、すなわち特別観について、例えばパネルデータは比較的、回答者の年代がばらついているのですが大きな違いはありません。

では、かけがえのない関係はどういう影響をもつのでしょうか？直観的に考えると、それだけ深く関わる関係なのだからそこから何かしらポジティブなものを得ているだろうと考えることができるでしょうし、実際、そのことはデータでも示されています。例えばFigure 1はパネルデータを再分析した結果を示しています。関係を特別なものだと思うことによって、その関係の中でサポートを得やすくなる、つまり何かあったときに特別な関係の相手ならきっと相談に乗ってくれるだろう、こういう期待が高まるということです。この結果には、初期の期待や適応指標による影響が反映され、例えば初期の充実感の高さが関係からのサポート利用可能性を高めている可能性もあり得るため、それらを統制した上での結果を示しています。また、仲介効果も確認されています。したがってかけがえがないと思う関係が安心の源として、そう思った人の適応を促進するといえるでしょう。この背景として、おそらく関

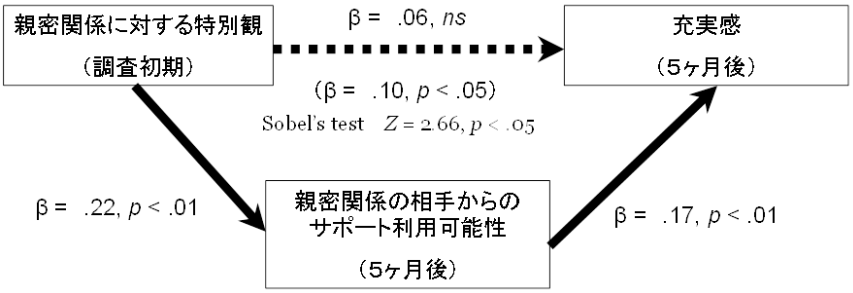

Figure 1 特別観から当事者の充実感への影響にもたらすサポート利用可能性による仲介効果

係内での協力的なやり取りが行われやすくなるということをイメージすることができます。

一方で、かけがえのない相手とだけ付き合うということは、それによる機会コストを生じさせもします。サポートを求める相手を限定してしまう側面があるわけです。横断データを別の観点から分析すると、Figure 2のとおり、夫婦関係を特別なものだと思っている女性ほど夫からサポートしてもらうことに抵抗を感じなくなる一方、夫以外の他者、ネットワークの中のほかの他者からサポートしてもらうことへの抵抗が強くなります(相馬, 2009)。

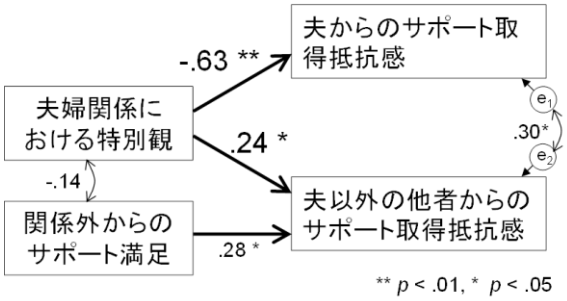

Figure 2 特別観が関係内・外の他者からのサポート取得にもたらす影響(相馬, 2009)

こう考えると、かけがえがないと思うことは、一面では関係の中での良好なやり取りを促進して適応を促進し、もう一面では排他的な性質によって多様なネットワーク資源を得られにくくするといえます。ただそのいずれが顕現化するのかは状況に依存するともいえます。つまり、関係の外からサポートを得たほうがいい状況なのか、特に得る必要のない状況なのかによって特別観が適応にもたらす影響もずいぶんと変わってくる、それだけの話だともいえるわけです。

しかし実際には、かけがえがないと思うこと自体が関係に悪影響をもつこともあると考えています。というのは、サポートと葛藤解決のバランスに関する研究に、ある関係の外のネットワーク他者からサポートを利用できなくなることは、特定の関係内での葛藤解決に悪影響をもたらすというものがあるためです(Lepore, 1992)。このことから、特別視した相手との葛藤であったり対立であったりが生じた際、その関係外からサポートを得られなくなると、積極的な問題解決を図れなくなる。特別視したばかりにそうなってしまうかもしれないということが予測できるのです。

夫婦であったり家族であったりという長期的な関係では、葛藤時に積極的に問題解決を図れることが重要です。なぜかといいますと、積極的に問題解決を図れないということは、必ずしも相手は意図していないかもしれませんが、相手からの理不尽な振る舞いにも文句を言わずに耐える、ということを意味するからです。そのことが長期的にどう影響するのかということについて、いくつかの研究が出ていますが(Feld & Straus, 1989)、簡単に言うと、耐えれば耐えるほど、相手の理不尽な振る舞いに対して耐える関係では、それがどんどんエスカレートしていくことがわかっています。この現象を考えた場合、その理不尽さがエスカレートした先の 1 つにあるものとして、いわゆるDVなど親密関係での暴力問題を考えることもできるわけです。そこでここに焦点をあてて考えてみることにします。

まず一面で、かけがえがないと思うことは、関係の中で協力的なやり取りを生じさせやすくするでしょう。これはすでに説明したとおりです。そこで協調的志向性という指標を使って協調的な行動の取りやすさを分析しました。相手の協調的な態度に対して自分も同じように協力的な対応を示し返すかどうかというものです。これは長期的な関係の中では学習の賞の機能をもち、相手のポジティブな行動に協力的に返すことで自分にとってもポジティブな行動を相手からどんどん引き出しやすくするだろうといえるものです。

ただもう一方で、先ほどのサポートと葛藤対処の研究から考えると、相手が理不尽なことを言った場合にそれに対してはっきり文句を言うとか、理不尽さを指摘するという非協調的な行動が、それ以上エスカレートさせないという罰の機能をもつといえます。非協調的な行動によって、相手に同じことを繰り返させないようにして、同様の行動を取りづらくするわけです。

以上のことから、かけがえのなさによって協調的行動をとれる結果、相手からの理不尽な行動が生じにくくなっていくということがある一方、かけがえがないと思ってしまうばかりに非協調的な行動がとれなくなり、関係の中での罰機能がはたらかなくなるかもしれない。その場合、結果として、相手の理不尽さがどんどんエスカレートし、その先には DV 被害を受けやすくなることがあるだろうと考えたわけです。

このことをパネルデータで検討したのが次の話です。Figure 3の結果では初期値の変数と5カ月後の変数を示しています(相馬・浦, 2010)。多重共線性の問題があるので、必要に応じて事前にコントロール済みの変数を用いています。

まず、かけがえがないと考えることは、一方では適応を促進する機能のあることが示されました。かけがえがないと思うことによって、協力的なやり取りを繰り返しやすくなり、相手が暴力を振るわなくなる、そういう過程です。関係の雰囲気が良くなって暴力がエスカレートしにくくなるという話だともいえます。最終的には、かけがえがないと思った側の抑うつの変化量も低下します。

それとは独立して、かけがえがないと思うことではっきりノーと言いにくくなる、つまり罰の機能が損なわれる。その結果、相手から理不尽なことを受け、間接的な暴力被

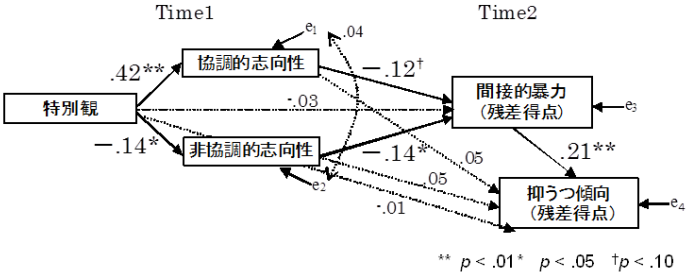

Figure 3 関係への特別観が協調的・非協調的志向性と間接的被害に及ぼす縦断的影響（相馬・浦, 2010）

害が高まり、ひいては受け手の抑うつも高まってしまう局面があることも示されました。つまり、かけがえがないと思うことは単に機会コストの問題を生じさせるだけでなく、関係内でのDV被害の脆弱性を高めて、関係の質を劣化させてしまう可能性もあるということです。

さて、これまでの議論を踏まえた上で、最近考えているのは、本当にそのかけがえながないと思う人には相対的な情報、いわゆる「現実」は見えてないのかどうかということです。いいかえると、親密な関係を考える際にそれを絶対的に考えるかということと、相対的な比較の中で考えるということとが相反するものなのか、ということに関心をもっています。

というのは、親密な関係の研究では、関係を判断する際の特徴には 2 つの側面のあることが示されているからです。1 つは、いわゆる平均値バイアスといわれているものです。これは、例えば配偶者であったり恋人であったりといった対象への評価を、何かしらの基準と比較した場合、基準以上に評価するというものです。一例をあげると、調査対象者が回答した配偶者の魅力と、実際に配偶者自身が回答した魅力との間に差があり、後者よりも前者の魅力がいわば現実以上に高く評価されるということです。こう考えると、たとえ基準となるものがあっても親密な関係を絶対的に高く評価する特別観の強さは概念的には平均値バイアスに近いものだと思います。

ところで、親密関係を当事者たちがどのように見ているのかという研究では、もう1つ、追跡制度の高さというものも特徴として示されています。こちらは差分の話ではなくて、対象者が回答した配偶者の魅力と、配偶者自身が回答した自身の魅力との相関を一例とするものです。つまり、回答者はある程度配偶者の魅力を高く評価するけれども、でたらめにそうするわけではないことが一方で報告されてもいるのです。

それぞれを示した研究であるとか、両方を示している研究もいくつかあったのですが、それらをメタ分析した結果、現象としては両立することが示されています(Fletcher & Kerr, 2010)。どのようにして両立するのかはよく分かってはいませんが、両立すると考えるならば、たとえ関係がバラ色に見えていても、他方では現実的な色彩を評価できてもいる、ということがあり得るといえます。

このことを示すように、例えば平均値バイアスはおおむね高い関係性評価を導きますが、追跡精度の高さは必ずしもそう高い評価を導きません。現実には関係の中でいいこともあれば悪いことも起きると考えるならば、追跡精度の高さが現実を反映した認識だということもできるでしょう。興味深いのは、平均値バイアスと追跡精度の高さを当事者が自覚しているかという話です。平均値バイアスについては自覚しているという報告が多いのですが(Boyes & Fletcher, 2007)、追跡精度の高さについては自覚がないようです(Thomas, Fletcher, & Lange, 1997)。何かしらの基準を反映させてある程度は関係のことを正確に理解できていても、そのことに気付いていないため、その情報をあまり利用しないかもしれないということです。

この場合、どちらが先かという問題はともかくとして、さらにこういえるかもしれません。特別観をもつということはどちらかというとバラ色に見えているということですが、バラ色に見えていることによる影響と、ある程度現実的な判断による影響とは、相反するわけではなくて、もしかすると独立的に機能する可能性があるということです。

これまでに特別観という絶対的評価に基づく影響を受け、関係外の他者からサポートを得ようとしなくなり、その結果として関係でのDVの脆弱性が高まるという話をしました。ただそれとは独立して、同時に相対的な情報による影響も生じるのではないかということです。つまり、実際に、関係外から自分の問題解決に役立つような、そういうサポートの得やすさに関する情報があれば、それはそれで利用するのではないかということです。

ここで、そもそもサポートの得られやすさとか利用可能性といわれるものは、当事者の動機づけだけで決まらない点を理解しておく必要があります。少しややこしいかもしれませんが、サポートを得やすいかどうかは、当事者のサポートを求めようとする動機以外の要素によっても多々影響されるわけです。例えば、家族をうっとうしく思うことがあっても、いざとなったらその力を借りることがあり得るわけです。

とすると、関係外に親密な関係での葛藤解決に役立つような、利用可能なサポートがあれば、その影響を受け

積極的な対処が可能になるといえます。つまりその場合、かけがえがないと思っていても、それらの影響を受けることなくなり、非協調的な態度も抑制されず、理不尽さに文句を言えずにいるということもみられなくなるだろうということです。

では、ある関係で葛藤が起きたり対立が起きたりした際、利用可能なサポートというのはどういうものかといえば、おそらくその 2 人に共通したネットワーク、2 人の味方になるような人ではなくて、対立相手のことは考えず自分だけの味方になるような、自分の立場だけを考えて愚痴を聞いてくれたり励ましてくれるような、そういうサポートでしょう。実際、横断データによる分析(Souma, 2010)では、Figure 4 のとおり、ネットワーク共有性の低い群では、つまり問題解決に役立ちそうなサポーターが周りにいる人たちでは、夫婦関係をかけがえがないと思っていても、非協調的行動がとられにくくなることのないことが示されています。他方、ネットワーク共有性の高い場合にはかけがえのなさによる悪影響が認められました。これらの違いの背景には絶対的判断とか相対的な判断というプロセスがはたらいているのではないかと最近考えています。

時間が来ましたのでこれで終わりにしたいと思います。

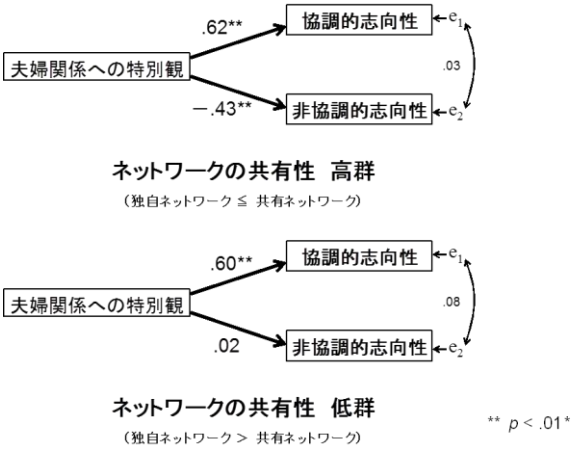

Figure 4　ネットワークの共有性が特別観から非協調志向性への影響にもたらす調整効果(Souma, 2010)

引用文献

浅見克彦 (2001). 愛する人を所有するということ 青弓社

Boyes, A. D. & Fletcher, G. J. O. (2007). Metaperceptions of bias in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 286-306.

Feld, S. L. & Straus, M. A. (1989). Escalation and desistance of wife assault in marriage. *Criminology*, **27**, 141-161.

Fletcher, G. J. O. & Kerr, P. S. G. (2010). Through the eyes of love: Reality and illusion in intimate relationships. *Psychological Bulletin*, **136**, 627-658.

Lepore, S. J. (1992). Social conflict, social support, and psychological distress: Evidence of cross-domain buffering effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 857-867.

Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.

相馬敏彦 (2009). かけがえのなさが他者への頼らなさをもたらす？ 第50回日本社会心理学会大会・第56回日本グループ・ダイナミックス学会大会合同大会発表論文集, 718-719.

Souma, T. (2010). Moderating effect of romantic partners' overlapping networks on the relationship between the perceived distinctiveness of their relationship and an uncooperative orientation. *Paper presented at the 11th Annual Society for Personality and Social Psychology Meeting*. (Abstract book pp. 118)

相馬敏彦・浦 光博 (2010). 「かけがえのなさ」に潜む陥穽: 協調的志向性と非協調的志向性を通じた二つの影響プロセス. 社会心理学研究, **26**, 131-140.

Thomas, G., Fletcher, G. J. O., & Lange, C. (1997). On-line empathic accuracy in marital interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 839-850.

筒井淳也 (2008). 親密性の社会学—縮小する家族のゆくえ 世界思想社

適応の二面性

―自己愛、二分法的信念、ポジティブ信奉―

小塩真司(中部大学人文学部)

今回お話しする内容は、自分が今まで取り組んできた研究の中で、少し変わった個人差にかかわる研究についてです。私自身の興味・関心は、いわゆる個人差、どのような個人がいるのか、どのような人間がいるのかという部分にあります。

自己愛

最初に取り上げるのは、自己愛です。自己愛については、最近出版した拙著(小塩・川崎, 2011)を参照していただけるとありがたく思います。自己愛の基本的な特徴は、自分に対する高い評価です。臨床像としては、誇大的な自己愛のパターンや過敏的な自己愛のパターンなど、いろいろなものがあります。しかし、基本的な特徴は、自分自身に対して高い評価をもち、誇大な感覚をもつことであり、それを何とか維持しようとするものであると言えます。

まず、このような自己愛的な人物が、リーダーになる傾向があるのかどうかについてご報告したいと思います(小塩, 未刊)[1]。

この調査は、大学1年生を対象とした、質問紙法の実習の中でとられたものの一部です。調査対象者は、男性 71 名、女性 51 名、計 122 名でした。初回の授業でプレテストが行われ、その後毎回の授業の中で、グループ活動を振り返った自由記述、そしていくつかの質問項目への回答が求められました。

プレテストの後、希望とくじびきによって 14 のグループにわかれます。各グループの構成員は 8～9 名でした。そして、話し合いによってリーダーが決められます。プレテストで測定された自己愛人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory Short version; NPI-S; 小塩, 1998, 1999)の尺度得点(M = 2.68, SD = 0.57)に基づき、平均 ± 1/2 SDを基準として調査対象者を 3 群に分類しました。

グループのリーダーを決める前に自己愛の調査をしているというわけなのですが、両者の関連は Table 1 のようになりました。人数は有意に偏っていて(χ^2 (2, N = 122)= 5.57, p < .05)、自己愛の低い学生はリーダーになりにくく、自己愛が中程度以上の学生がリーダーになりやすい傾向がみられました。自己愛が高い人というのは、自己主張が強かったり、あまり臆せず話をする傾向があったりするようですので、話し合いをすると、リーダーになりやすい傾向があるようです。

Table 1　自己愛の高さとリーダー／フォロワー

		自己愛			
		低	中	高	合計
リーダー	人数	1	8	5	14
	%	0.82	6.56	4.10	11.48
フォロワー	人数	41	36	31	108
	%	33.61	29.51	25.41	88.52
合計	人数	42	44	36	122
	%	34.43	36.07	29.51	100.00

毎回の作業の振り返りの中に、「グループの活動に貢献した」という質問項目がありました。「全く当てはまらない(1 点)」から「とてもよく当てはまる(6 点)」までの段階で回答を求めています。自己愛による 3 群別の平均値を示したグラフが、Figure 1 です。

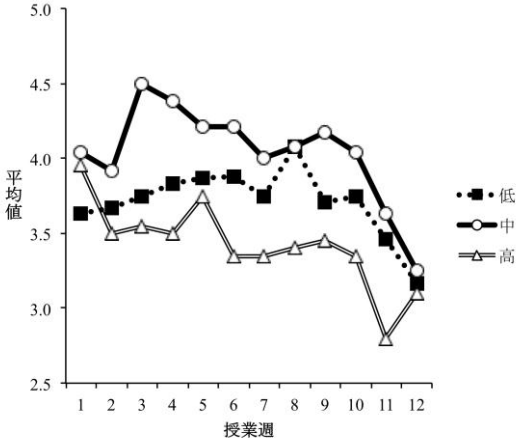

Figure 1　自己愛 3 群ごとの授業における貢献度

このグラフ(Figure 1)の中で、自己愛が高い学生は、実は最も貢献していないと自己評定する傾向にありました。自己愛が高い人物は、自分に自信がありますので、「貢献した」と回答する傾向にあるのではないかと予想されるのですが、実は逆の結果となっていました。

この授業はなかなかハードワークで、学生に対してプレッシャーを与えるような内容が多くあります。書いてきたレジュメにダメ出しをしたり、もっと考えなければいけないと言ったり、厳しい指導が教員から与えられます。グラフを

見ていただくとわかると思うのですが、自己愛が高い人物の得点が、週を追うごとに低下していく傾向が見て取れるのではないかと思います。実際に授業をしている感覚では、グループの活動の周辺にいるようになる印象もあります。

自己愛的な学生が、授業当初はリーダーになりたがる一方で、貢献度が低下していくというのは、グループ活動全体にとってはあまりよい結果をもたらさないかもしれません。ただし、すべての週に出席した学生数は全体の半分程度であることもあり、交互作用が有意ではない点はお断りしておきます。

二分法的思考

では、次のテーマに入らせていただきます。私自身が数年前から取り組んでいる研究の 1 つに、二分法的思考があります。

今年の震災や原発事故に関連した報道でもそうだと思うのですが、できるだけ物事をシンプルに、単純化して考えようとする志向性はよくみられるのではないかと思います。「それが結局、危険なのか、安全なのか」、「それは結局、健康によいのか、悪いのか」というような判断の仕方がとられるわけです。二分法的思考とは、このような、白黒、善悪といった物事を 2 つに分類する思考の傾向です。

分類をするというのは、人間の基本的な思考様式です。例えば言語そのものが、物事のどこかに線を引いて名付けるという行為を反映しています。しかしその一方で、二分法的思考には個人差があるとも考えています。複雑な物事をシンプルなものに分類したい、そうすべきだ、そうすればうまくいく、という思考の様式がいくつかのパーソナリティ障害にかかわることも、認知行動療法の分野では指摘されてきています(Beck, Freeman, Davis, & Associates, 2004)。

私は、この二分法的思考を測定する尺度である、二分法的思考尺度(Dichotomous Thinking Inventory; 以下 DTI とする; Oshio, 2009)を作成しています。項目内容は、「何事も好き嫌いをはっきりしたほうがうまくいく」、「すべての人は「勝ち組」と「負け組」に分かれると思う」、「あいまいなことも白黒はっきりさせるとうまくいく」といったものです。いずれにしても、曖昧なものを避けて白黒はっきりさせるとうまくいくのだと思っている人を、見出すための尺度です。

この尺度が、ほかのどのような尺度と関連があるのかを検討しています(Oshio, 2009)。例えば、自己愛と正の相関関係にあり、境界性パーソナリティ障害傾向とも低い値ですが正の相関がみられました。また、完全主義や曖昧さに対する非耐性、他者軽視とも正の相関がみられる一方で、自尊感情とは無相関という結果も得られています。自尊感情とは無相関である一方で、自己愛とは正の相関がみられるという点は、興味深いところだと思います。

以前、実験参加者に女性の顔写真を見せて評価をさせるという実験をしたことがあります(小塩, 2009)。事前の調査で顔写真を容姿によって高・中・低に分類しておき、実験参加者に 1 枚ずつ提示します。そして、「美人である」、「かわいい」、「好感がもてる」、「知り合いたい」という項目に評定を求めました。実験参加者は大学生 80 名(男性 45 名、女性 35 名)でした。結果は Table 2 に示されています。DTI とこれらの項目への反応との関連を検討しますと、二分法的思考が容姿があまり望ましくない写真に対する評価を押し下げるような効果をもつことが明らかにされました。先ほど、二分法的思考が他者軽視との間に関連があるという話をしましたが、二分法的な思考をする者は、少しでも他者の良くない面が見えたときに、一気に評価を下げるようなステレオタイプ的な特徴をもつ様子がみられます。

このようなステレオタイプ的な思考の背景に何があるのかと考えてみたときに、1 つの要素として、暗黙の知能観を取り上げてみたいと思います。暗黙の知能観はドゥエックらの研究としてよく知られています(Dweck, 2006)。暗黙の知能観とは、知能とは何かという問いに対する個人の解答のことです(上淵, 2003)。固定的知能観、つまり人の能力が生まれつきだと思っている人というのはステレオタイプ的な判断をしやすいという先行研究があります

Table 2 各写真に対する評価と DTI との関連

	中程度の容姿			
	美人である	かわいい	好感がもてる	知り合いたい
DTI total	-.04	-.02	-.16	-.03
	容姿上			
	美人である	かわいい	好感がもてる	知り合いたい
DTI total	.10	.06	-.10	-.03
	容姿下			
	美人である	かわいい	好感がもてる	知り合いたい
DTI total	-.22 *	-.25 *	-.28 *	-.28 *

* $p < .05$

Table 3 暗黙の知能観と二分法的思考の関連

	暗黙の知能観[注)]			
	頭の良さ	効率の良さ	要領の良さ	知識の多さ
DTI				
総得点	.26 ***	.23 **	.31 ***	.05
二分法の選好	.23 **	.13	.23 **	-.04
二分法的信念	.20 *	.27 ***	.30 ***	.18 *
損得思考	.19 *	.07	.14	-.07

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注) 高得点は固定的知能観を意味する

(Levy, Stroessner, & Dweck, 1998)。

Table 3 が、暗黙の知能観と二分法的思考との関連の結果です(小塩, 2011)。やはり、二分法的思考は、人間のさまざまな能力を生まれつきで変化しない方向に、固定的に捉える傾向に関連していました。例えばこれが対人関係であれば、二分法的な思考をする人物は、相手との中で関係を培っていくというよりも、相性が生まれながらに固定していると考える傾向があると考えられます。

ポジティブ信奉

最後に、最近共同研究で取り組んでいる概念があります。アメリカでは、バーバラ・エーレンライクが『ポジティブ病の国、アメリカ』という本を出版しています(Ehrenreich, 2009)。この本の中でエーレンライクは、過度に自己のポジティブさを求める文化を批判的に論じています。

自己啓発セミナーや自己啓発書だけではなく、多くのビジネス書においてもみられるように、現代の人々は多かれ少なかれ、自己啓発的なものに惹かれたり、また社会から求められたりもします。会社の中でも、スキルアップや自分の能力を高めることを求められ、研修をしたり自己啓発書を読んだりする社員は多いことでしょう。そういった中では、ポジティブな自己を最大化する、それからネガティブな自己を克服するということが求められます。

しかしながら、皆うまくそのようなことをできるわけではありません。ポジティブに考えなければいけないという思考がうまくできない人もいるというわけです。文化の中に「ポジティブであるべき」という考え方が根付いていますと、そのような人は「自分はやっぱりダメな人間なんだ」と、自己否定が強まっていってしまうことがあるかもしれません。さらには、ポジティブな自分を求めようとすること、ここではそれを「ポジティブ信奉」と呼んでいるのですが、ポジティブな思考や感情をもつことを絶対的な善、それをすべきだと考える思考の特徴を明らかにする研究を進めています。

このポジティブ信奉の個人差を測定するために、ポジティブ信奉尺度(Scale of Excessive Positive Thinking; SEPT; 中間・小塩, 2010)を作成しています。質問項目としては、「自分の心がけ次第で、人生はいくらでも変えられると思う」、「よい方向にものごとを考えることで、ものごとは実際によくなっていくと思う」などポジティブな思考を求める傾向と、「くよくよ悩んだりするのは、無駄なエネルギーを使うことだと思う」、「悪い予測をすると、それに見合った結果になってしまうと思う」などネガティブな思考を意識したり避けたりする内容で構成されています。このポジティブさを求める志向性とネガティブさを避ける志向性の間には、r = .20～.40 程度の正の相関がみられます。ですから、ポジティブなものを求める傾向と、ネガティブなものを避ける傾向は、同じような方向性にあるということです。

この SEPT とほかの尺度との関連ですが、自尊感情、本来感、幸福感いずれも r = .30 程度の相関がみられます(中間・小塩, 2011)。また、SEPT の下位尺度の中には、二分法的思考と r = .20 程度の相関を示すものもあります(小塩・中間, 2010)。

SEPT と、具体的な行動傾向との関連を検討した結果があります(小塩・中間, 2010)。Table 4 に示した「履修授業数」は履修している授業数、「生き方を考える時間数」や「予習復習時間数」は実際の時間、「夢や目標をかなえるための本」、「所属クラブ・サークル数」や参加回数、訪問数なども実際に経験した冊数や回数について回答を求めました。Table 4 のほかにも測定しているのですが、ここでは関連が見出されたものだけをピックアップしています。なお、Table 4 中の数値は順位相関係数です。

結果から、SEPT の中でも「PT 選好」つまりポジティブ思考を好む傾向が、これらの行動いずれにも関連していることが明らかになりました。ポジティブ思考を好む学生は、履修授業数が多くクラブやサークルにも所属し、予習復習も行い、飲み会にも参加するといった、充実した学生生活を営む傾向にあるようです。その一方で、自己啓

Table 4 ポジティブ信捧尺度と日常行動との関連

	SEPT下位尺度[注]			
	PT選好	PT過信	NT忌避	NT過信
履修授業数	.24 **	.01	.03	.03
生き方を考える時間数	.22 **	.10	.08	.12
夢や目標をかなえるための本	.22 **	.15 *	.11	.09
所属クラブ・サークル数	.19 **	.06	-.01	-.05
自己啓発関連セミナー参加回数	.19 **	.15 *	.12	.10
スピリチュアルスポット訪問数	.19 **	.02	.05	.03
占い経験数	.18 *	.03	.16	.13
夢や目標のために使う金額	.18 *	.08	.06	-.04
予習復習時間数	.18 *	.07	.10	.14 *
１ヵ月の飲み会数	.17 *	.14	-.09	.06
１年間の目標数	.14 *	.09	-.07	-.02

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

有意な相関がみられた項目，Spearmanの順位相関係数

注) 中間・小塩(2010)で見出された下位尺度による

発セミナーへの参加回数、これは大学生に調査をしていますので、自己啓発セミナーにいく学生がいるんだと思ったのですが。もちろん、回数は多くありません。しかし、順位相関を算出すると関連が見出されました。また、スピリチュアルスポットの訪問数や占い経験数も関連しています。実際に、パワースポットに行ってみたり、占い館などに行って占ってもらったりしているということです。夢や目標に使う金額などにも関連がみられました。

ポジティブ信奉、特にポジティブであろうとする志向性の持ち主は、そうあろうとしてさまざまな活動に従事するようです。しかし、なんといいますか、結果的に適応的にならないような行動も含まれているように感じられます。ポジティブであろうとすることが、逆効果にもなるような現象がそこにあるのではないかと予想しています。

最後に

私自身が取り組んできた研究では、いわば非常に極端な個人差といいますか、少し変わった個人差に注目してきたといえるのではないでしょうか。自分自身、そのような変わった個人差に興味があったのだと、今回の資料をまとめながら再認識させていただきました。

自己愛といいますのは、望ましい評価を過剰に求めていくといいますか、自分を高め、望ましい評価を得ようと格闘することにつながります。二分法的思考は、できるだけシンプルに物事を考えようとします。そして、ポジティブ信奉は、自分自身をできるだけよい方向にもって行こうと試みる傾向です。つまり、これらの個人差特性というのは、いずれかの方向に過剰な特性を有している。しかし、このような人々はどこかに存在している。平均値を見ても、それほどまれな存在ではありません。

社会が多様化していますので、どこかに価値基準を置いて物事を判断したいという欲求も高まっているように感じられます。物事を判断する価値基準を明確にもつことで、安心が得られる面もあるのかなと。ところが、先ほどポジティブ信奉のところで見たように、意外とそのような明確な価値基準に基づいて行動するということは、適応を自分自身から限定していってしまうような傾向も併せもっているのではないかと思います。

今回の報告のような過剰な特徴を示す個人差特性を高くもつ個人というのは、社会の中できわめて限定された場所でしか生きられないといいますか、適応できる場所が限られる傾向があると思います。しかし、社会の多様化ということを考えますと、逆にそういった人々も、どこかで生きていけるという側面も、あるように思います。

引用文献

Beck, A. T., Freeman, A., Davis, D. D., & Associates. (2004). *Cognitive therapy of personality disorders (2nd ed.).* New York: The Guilford Press.

Dweck, C. S. (2006). *Mindset: The new psychology of success.* New York: Random House.
(ドゥエック, C. S. 今西康子(訳) (2008). 「やればできる！」の研究: 能力を開花させるマインドセットの力 草思社)

Ehrenreich, B. (2009). *Bright-sided: How the relentless promotion of positive thinking has undermined America.* New York: Metropolitan Books. (エーレンライク, B. 中島由華(訳) (2010). ポジティブ病の国、アメリカ 河出書房新社)

中間玲子・小塩真司 (2010). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(1)—ポジティブ信奉尺度の構成— 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 58.

中間玲子・小塩真司 (2011). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(3)—自己報告による心身の適応との関連— 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 32.

Levy, S. R., Strosener, S. J., & Dweck, C. S. (1998). Stereotype formation and endorsement: The role of implicit theories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1421-1436.
小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究 －性役割観との関連－ 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **45**, 45-53.
小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
Oshio, A. (2009). Development and Validation of the Dichotomous Thinking Inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, **37**, 729-742.
小塩真司 (2009). 二分法思考を行う者の他者評価 —容姿に注目して— 日本パーソナリティ心理学会第 18 回大会発表論文集, 150-151.
小塩真司 (2011). 二分法的思考と暗黙の知能観 日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会合同大会発表論文集, 136.
小塩真司・川崎直樹(編) (2011). 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係— 金子書房
小塩真司・中間玲子 (2010). 現代青年におけるポジティブ信奉の功罪(2)—他の指標との関連— 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 59.
上淵 寿 (2003). 達成目標理論の展望—その初期理論の実際と理論的系譜— 心理学評論, **43**, 392-401.

註

1) 小塩真司 (未公刊). 自己愛と継続的グループ活動 日本心理学会第 75 回大会 ワークショップ 「自己愛研究の最前線(4): 自己愛的パーソナリティと日常行動」資料 2011 年 9 月 16 日

適応論へのご招待

結城雅樹(北海道大学文学研究科)

北海道大学の結城です。この度は、本ワークショップの指定討論者としてお招きいただき、誠にありがとうございました。簡単に自己紹介いたしますと、私の専門分野は社会心理学と文化心理学です。これまで、人間が集合的に作り出す社会の多様性と、そこで作られる人間の心理・行動特性の多様性の関連を、適応論アプローチ、もしくは社会生態学的アプローチ、と呼ばれる理論的立場から検討してきました。今回のワークショップのテーマは「適応」ということで、私自身の立場から、コメントさせていただきます。

本ワークショップの意義

ではまず、本ワークショップの意義について。冒頭の企画趣旨説明の中で、橋本先生は、現代社会が、「価値観の多様化とその絶対性の喪失」、「サイバースペースの際限なき拡張」などの、いわゆる「拡張」を経験しているとされました。そしてこの「拡張」の下で、「自己顕示的サイバー攻撃」を含む「モラルやマナーの衰退」といった新たな問題群が登場していると指摘されています。そしてその上で、(ここが重要なのですが)「一見不合理・不適応的にも思われるこうした心性が、人々が現代社会で生きていくために有効な適応方略である可能性」や、「逆に、一見合理的・適応的に見える方略が実は不適応的な帰結をもたらし得る可能性」といった、非常に興味深く、かつフレッシュな問いを提出されています。これを私の視点から言い直せば、こうした現代的諸問題の理解と解決には、人間を「環境への適応の主体」として捉える視点が必要だとの宣言と読み取れ、諸手を挙げて賛成するとともに、この立場にコミットしてきた一人として、大変うれしく思います。

そして、以上の問題設定のもとに、3 名の話題提供者の先生方から研究発表がありました。金政先生は、現代人に顕著とされる「自己目的化」という心理現象が、幸福感の低下、自己愛傾向や攻撃性の増加といった、非適応的な心理傾向と関連していることを示されました。小塩先生は、自己愛、二分法的信念、そしてポジティブ信奉といった、やはり現代人に顕著とされる心理が、自尊感情や他者からの好意的評価などの適応性と関連する一方、ステレオタイプ的判断や他者軽視などの非適応性とも関連することを示されました。相馬先生は、親密関係における「かけがえのなさ」すなわち特別観が、安心感や充実感といった適応性と関連する一方、周囲からの援助の拒否や、DV に対する脆弱性の増加といった非適応性とも関連していることを示されました。いずれもが、橋本先生のおっしゃる「拡張した現代社会」で顕著とされる心理傾向がもたらすコストとベネフィットを取り扱っており、社会的意義の大きい、大変重要な研究だと評価できます。

では以上を踏まえ、適応論という私の立場からは、これらの研究の次のステップとしてどのような提案ができるでしょうか。時間の関係もありますので、ここでは 2 点に絞って論じます。

提案 1 環境の誘因構造と適応心理の分析

第 1 点目の提案は、環境の誘因構造と適応心理の関係の分析です。

適応論の観点からすると、今回の 3 つの発表すべてにおいて、実は 2 つの重要な観点が抜け落ちていました。それは、1) 「拡張しつつある」とされる現代の社会環境に存在する誘因構造の分析がなされていないこと、そして 2) その誘因構造の下で適応的となる心理・行動傾向の同定がなされていないこと、です。

これらの問題の意味を正確に理解するには、まず進化論の始祖であるチャールズ・ダーウィンによる、あまりにも有名なガラパゴス諸島における発見の例を取り上げるのがよいでしょう。ダーウィンは、ガラパゴス諸島の小さな島の間で、フィンチと呼ばれる小鳥など同一種の個体の身体形質が大きく異なることに注目しました。そしてその後行われた研究により、その差異の原因は、木の種や葉、もしくはさまざまな種類の虫、といった、それぞれの島に独特の採餌環境に対応していることが明らかにされました。つまり、これらの動物の個体の特徴は、それぞれの環境に存在する誘因の下でより大きな利益を得られる形で、すなわち「適応的に」進化してきたものであったわけです。ここで特に注目していただきたいのは、ダーウィン以降の生物学者たちが、それぞれの島における餌の種類の分布という、環境に含まれる誘因構造の分析を丹念に行い、それと個体の特性との関連の法則を見いだしたことです。

そしてこの考え方は、人間の行動や心理傾向の説明にも応用が可能です。十数万年前にアフリカを出たとされる人類は、その後現在まで、きわめて過酷かつ多様な自然環境を生き延びてきました。こうした自然環境への適応の過程において、人類はさまざまな大きさや種類の社会集団、もしくは文化を生みだし、利用してきました。そし

て最も重要なことは、そもそもは適応のための道具であったはずの集団や文化それ自体が、個々人が適応すべき環境となったということです。つまり、私たち人間の心と行動は、多様な自然環境に加え、多様な社会環境に対しても、柔軟に対応できる可塑性と適応性をもち合わせているのです。よって、人間の社会心理を理解するためには、私たちが住む社会環境はどのような構造をもち、またそこでどのような適応行動が要求されるのか、すなわち社会の誘因構造の分析が不可欠なのです(亀田・村田, 2000)。

これを本ワークショップのテーマに適用すると、まず先生方が答える必要のあるのは、社会が「拡張」すると、そもそもなぜ「自己拘泥」や「二分法的思考」や「特別観」といった心理傾向が生み出されるのかという問いです。これに答えるためには、まず何よりも、「拡張した社会」とはいったいどのような誘因構造をもつ社会であるのかを考察する必要があります。具体的には、こうした社会ではどのような行動をとることが個人に利益をもたらし、どのような行動が不利益をもたらすのか、そして、そうした行動を生み出しそれを支える心理傾向とは何であるのか、についての理論的な分析を行うことです。

ここで 1 つご注意いただきたいことがあります。それは、この「適応価」を強調する問題設定は、当該の心理傾向がコストを伴うものであることを否定するものではないということです。ここで言いたいのは、まずは「当該の心理傾向が増加したからには、それが当該の環境構造の下ではコストを上回るベネフィットをもたらしたはずだ」という前提を置いて分析してみましょう、ということです。だからこそ、なおさら冷静なコストとベネフィットの査定と比較が不可欠なわけです。

しかし、話題提供者やフロアの先生方の多くは納得されないかもしれません。「そうは言っても、データを見れば、やはり明らかに非適応的な帰結をもたらしているではないか」という主張です。これには私も同意します。つまり、解かなければならない最大の理論的パズルは、適応論からすれば「適応的」でなければならないはずの「現代的な」心理傾向が、なぜ結果として大きなコストをもたらしている(もしくは少なくともそのように見える)のか、ということです。この問いに対しては、2 つの解答があると思います。

まず、これらの心理傾向が非適応的であるというのは研究者による偏見と研究手続きのアーティファクトにすぎず、実際には適応性が高いという可能性があります。私がこの懸念をもった理由の 1 つは、今回の発表の中でも、当該の心理傾向が概念定義される際に、すでに「焦燥感」、「過大」、「不当」などという否定的な用語が含まれている場合があることに気づいたからです。さらには、一部の尺度のワーディングにも、明らかに否定的なものが数多く含まれています。これでは、当該の心理傾向が否定的な特性と正相関するのは当然だと言えましょう。

しかしその一方で、これらのいわゆる「現代的な」心理傾向が、やはり人々に適応をもたらしていない可能性は依然として残ります。その原因として考えられるのは、ある種の「適応の道具」は複数の心理傾向のセットとして初めて機能するものであり、それがすべて揃わないと役に立たないという可能性です。言い換えれば、当該の心理傾向自体は適応のために必要ではあるが、それだけでは十分ではない、という可能性です。

例えば、金政先生の発表における「自己目的化」とは、「自分の目標・能力・才能・可能性・特別性などについて反芻的に考え、囚われてしまうこと」を指します。たしかに、こうした囚われの中で動きが取れなくなることは非適応的でしょう。

しかし、この「囚われ」は、「自己について反芻的に考えること」の必然的な結果なのでしょうか。もしも人々が、人生の選択肢が広がった社会環境において、自分の目標・能力・才能・可能性・特別性について真剣に考え、そしてその結果、選択肢が少ない場合と比較してよりよい決定ができるとすれば、それはむしろ望ましいことではないでしょうか。そうだとすれば、本質的な問題は、こうした決定を阻害しているものは何か、ということです。

その可能性の 1 つは、人々が「選択のためのスキル」をもち合わせていないことです。つまり、人生の選択に迫られた際に、どんな情報を考慮に入れ、どんな情報は無視し、どのタイミングで情報収集を打ち切ってとりあえずの決定を下すべきか、についての意思決定スキルです。こうしたスキルは、自然に身につくものではなく、おそらく幼少期から長期にわたり、家庭や教育現場における公式・非公式の教育や、さまざまな社会的場面におけるトライアルアンドエラーの経験などを通じて醸成しなければならない、文化的に共有された知識だと考えられます。つまり、現代社会には伝統社会と比較して人生の選択肢がより多いため、自己の能力や目標などについて熟考することは当然必要なのだが、熟考した情報をもとに適切な選択をするためのスキルを獲得させるための社会的なシステムが、私たちの社会にはいまだ成立していないのだとは考えられないでしょうか。

提案 2 比較社会研究のススメ—異なる環境を比べてみよう

さて第 2 の提案は、方法論に関してです。ここでは、「比較」の有効性についてお話ししておきたいと思います。

今回のすべての発表をうかがっていて非常に気になったのは、いずれの研究もが、「今日の日本人」を対象とし

た、個人差の相関研究であることでした。しかし先に述べたように、先生方が本当に知りたいことは、社会環境の変化と個人の心の変化の関係、およびその帰結、なのではないでしょうか。

そうであるならば、必然的に、仮説検証の道具として、異なる社会状況間の比較が必要になってくるはずです。社会が「拡張し、選択肢や不透明性が増大」したときに何が起こるかについては、そうした変動が起こった前後の人々の心理的変化を、時間軸を含むデータで比較するなり、現時点においてそうした特性をもつ社会ともたない社会に暮らす人々を比較するなりしなければ知ることができないのではないでしょうか。

一例を挙げれば、文化心理学における近年の研究では、「分析的思考様式」が、東アジア人よりも北米人の間で優勢であることが明らかにされています。この思考様式の表れの 1 つに、論理的矛盾を許容せず、また「白か黒か」を明確にしたがる志向性があります(Nisbett, 2003)。これは、小塩先生が取り上げられた二分法的思考にきわめて類似した現象です。それでは、小塩先生による個人レベルの相関分析に関する知見は、そのまま東アジア人と北米人の間の差異の説明にも適用可能なのでしょうか。もしそうでないとすれば、それぞれの社会に特有の干渉要因が存在するのでしょうか。

こうした問題を設定すること、そしてそれに理論的、実証的に答えていく試みは、「心と社会の相互関係の科学」としての社会心理学の発展に大きく役立ち、また現実的なインプリケーションも大きいものであると信じております。

先生方の「次のステップ」への期待を込めまして、指定討論を終了いたします。お役に立てば幸いです。

引用文献

亀田達也・村田光二 (2000). 複雑さに挑む社会心理学: 適応エージェントとしての人間 有斐閣

Nisbett, R.E. (2003). *The geography of thought: How Asians and Westerners think differently…and why.* New York: Free Press.(ニスベット, R.E. 村本由紀子(訳) (2004). 木を見る西洋人・森を見る東洋人: 思考の違いはどこから生まれるか ダイヤモンド社)

Nisbett, R. E., & Cohen, D. (1996). *Culture of honor: The psychology of violence in the South.* Boulder, CO: Westview Press. (ニスベット, R.E.・コーエン, D.(著) 石井敬子・結城雅樹 (編訳) (2009) 名誉と暴力:アメリカ南部の文化と心理. 北大路書房)

山岸俊男 (1998). 信頼の構造: こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会

註

1) 社会の多様性の下で人間の心理にどのような多様性が生まれるのかについての優れた論考に、Nisbett & Cohen (1996)および山岸 (1998)がある。

質疑応答

○司会(橋本)　時間もあと残りわずかになってしまいましたが、結城先生からのコメントに対する話題提供の先生方からのご返答を簡単にいただきたいと思います。その前に合わせてフロアの皆さまから、もし何か話題提供の先生方に訊いておきたいことなどがありましたら、先に訊いておければと思います。―大坊先生、よろしくお願いいたします。

○会場(大坊)　大阪大学の大坊です。とても面白く聞かせていただきました。結城先生の話の中にもちょっとあったのですけども、特に金政さんとか、相馬さんもそうですが、相関を問題にされている。そうすると、どちらもそうなんですが、例えば、自己希薄化ということ自体をもたらす原因はなんなのかについてほんとはもっと説明して欲しかった。だから要因間の関係が循環しているのですね。その進むプロセス、そこでのなんらかの循環性。それについて、ちょっとアイデアがあればうかがいたいのですが。

○司会(橋本)　はい。ありがとうございます。そのほかにご質問などある方、いらっしゃるでしょうか。よろしいでしょうか。―時間のこともありますので、では、金政先生から、結城先生と大坊先生のご質問について。

○金政　はい。金政です。まず結城先生のコメントに関してお答えさせていただきたいと思います。進化論的観点というのは確かにツールとしては非常に強力なものだとは思います。ただ、そのような強力なツールである進化論に乗らないのがまさに現在の人間の状況ではないかと。進化って後からついてくるもので、現在私たちが進化的に獲得したであろう特徴のいくつかは過去において適応的だったものであり、現在適応的であろうもののいくつかは遠い未来においてそれが表れる。進化的特徴にはディレイするものがある。だから、私は、現代のように急激に変化する環境において、現状どういったものが適応的特徴であるのかについて進化的な視点から議論するのは難しいと思っています。例えば、30とか40年前なんかだったらインターネットはほとんどないような状況で、それがこの 20 年間ぐらいで一気にガッと広がった。では、それと同じようなスピードで人間の認知構造みたいなものが広がったのかっていうと、そうではないような気がします。その溝っていうか、乖離がまさに不適応さを生み出す源泉となるのではないかと考えています。そういう意味では、evolutionary なものを E 適応、social なものを S 適応みたいに適応というものを分けて議論したほうがいいのかもしれません。

大昔の人間はおそらく集団の中に生きざるを得なかった。だからこそ、ある種、集団の制約に従うという行動や思考のパターンも集団の中で生きるために身に付けてきたものであろうし、また、それらの行動や思考のパターンは現代でも残っている部分がある。そういうものが適応と絡んでくる。Baumeister や Leary のソシオメーター理論のようなものですね。しかしながら、ネットを通してさまざまな社会的な繋がりを確保できる現在のような社会において、どのような集団っていうものが人間の頭の中で構築されているのかっていうのは、僕もちょっとよく分からない。

砂漠の中でポツンと一人いる状況において、何をもって適応的とするのかという問題はありますよね。一般的に社会的な因習に従っておけばいい場合とか、集団におけるルールっていうものに一貫性があるというような状況であれば、その集団における適応的な行動ってものがあったんでしょうけど、今みたいにルールがたこつぼ化した中ではどの集団に対して何を適応させていくのかっていうものが、おそらく個人の中でうまく定まらないのではないのかな、と思います。社会的な進歩のスピードに果たして人間の認知や思考は追いついているんだろうか、そういう疑問が僕の中にあって、そのひずみみたいなものが自己の目的化というか、自己に拘泥せざるを得ないような心性を導きだすのではないのかなと考えています。

また、選択肢についての問題なのですが、選択肢が増えても選択のスキルがあればきちんと選択できるのかというと、実は、僕はあまりそういうふうには考えていなくて。たとえスキルがあっても選択肢が多くなれば選択決定なんてできなくなっていくのではないか。それはスキルのように鍛えられるものではなくて、そこはまさに進化論的な話で、人間が認知できるものやことには限界がある。5 つとか6つとか、選択肢が呈示されてそれらの中から1つを選ぶのであれば何とか選ぶことはできるんだけれども、100つの中から1つ選ぶとなると、選択基準が多様になり過ぎてどう選んでよいかわからなくなる。まず、100 の選択肢を認知すること自体がそもそも大変ですよね。人間の認知構造は膨大な量の中から何かをピックアップするというような機能をもち得ていなくて、逆に言うと、そのような機能をおそらく他者や集団に対する共感性とかメタ認知にシフトさせることで生き延びてきたのが人間なのでは

ないのかなと思うんです。

次に、大坊先生の質問に関してですが、自己希薄化などの原因は何かって言われると、遠因としては、やはり人間の認知がいわゆるテクノロジーや社会の進展に対応しきれていないところからくるのではないかと考えています。色々なものが一気に急激にバッと発展しすぎて、それに対応するスペックが人間の中に備わっていないのではないかと。それにも関わらず、人間は欲望するものですから、目の前にあるものはあるもので欲しいし、一度手にしたものをなかなか手放すことというか元に戻すことはできない。テレビなども、アナログしかなかった頃はそれを見ていてまったく不満などなかったのに、デジタルテレビを見た後でアナログを見ると、画像が荒いと感じてしまって、もうアナログなんて見られないと思ってしまう。携帯電話などもそうですよね。そういった経験や急激な社会の変容が短い間に一気にドッと押し寄せてきて、それに対応するだけの構えが人の心に準備できていない。どこにアンカーを下ろしていいのかが定まらない。そういったことが自己希薄化などの遠因ではないかと考えています。それゆえ、自己希薄化などの近因を特定して、例えば実験的に操作してみるというのは難しいというか、ほとんど至難の業のような気がいたします。

○相馬　ありがとうございました。大坊先生のご指摘もそうですが、特別観を構成するものは何かとか、ひいては逆因果の可能性はという点です。そもそも、かけがえがないとか、排他的にコミットすることが夫婦関係などの親密な関係の特徴的であることの究極因としては、おそらく配偶にかかわるということがあり得ると考えています。ただ、それをどう表現するのかは少し難しいとも思っています。

では究極要因ではなくて、より近い要因で、特別観というものを決めるものはなんなのかなということを考えてはいるのですが、今考えているのは、バラ色に見えるということを必ずしも望んでそうしているとはいえないということです。つまり、望んでそうしていることもあるけれども、そうでないこともあるのではないか。バラ色にあると考えざるを得ないような要因もあるのではないかと考えているところです。ありがとうございました。

○小塩　えーと、そうですね。社会が多様化するっていうことを考えますと、社会が多様化して、修正の機会がないからこそ、そのまま何も修正されることなく、極端な個人差の人間が存在するままになっている。その人たちが違った環境に行けば不適応的になる可能性はあるんですけども、そのまま安住の地を見つければ、なんの問題もなく暮らしていくというようなことが至るところにあるような気がするんです。

ある意味で社会の多様化というのはそういう人たちを許容する社会であるはずで、例えばそれを画一化することのほうがむしろさまざまな弊害を生み出すといいますか。学校教育とか、就職活動とか、そういうことをすることのほうが何か弊害を生み出すような印象が。そういう意味ではいろんな個人がいろんなところで適応している。そこから外れるとなんかうまくいかないっていうようなことが細かくなってきているのかなというのが、私の印象です。

○司会(橋本)　ありがとうございました。まだまだいろいろな議論を展開したいところではありますが、残念ながらすでに時間が超過してしまいました。また今後機会がありましたら、またいろんな形で議論を展開させていただければと思います。大変刺激的な話題提供をしてくださった先生方、それから指定評論の結城先生も含めて、今一度拍手をお願いいたします。

註

本論文は、日本社会心理学会第52回大会の初日(2011年9月18日)に行われたワークショップ「拡がる世界、狭まる視界—適応方略の不適応性、不合理な心性の合理性—」(企画：橋本　剛・金政祐司、話題提供：金政祐司・相馬敏彦・小塩真司、指定討論：結城雅樹、司会：橋本　剛)の記録をもとに編集したものである。本記録の当誌への掲載をご推薦・ご快諾くださった大坊郁夫先生はじめ対人社会心理学研究編集委員会の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

なお実際には、結城はやむを得ない事情により当日のワークショップ会場には来場できなかったが、事前に話題提供者から提供された発表内容を受けてのコメントを作成し、そのコメントを当日橋本が代読するという形をとった。

Broader horizons, narrower vision:

Locally adaptive, globally maladaptive strategies and the rationality of irrational mind

Yuji KANEMASA (*Faculty of Psychology, Otemon Gakuin University*)
Toshihiko SOMA (*Graduate School of Social Sciences, Hiroshima University*)
Atsushi OSHIO (*College of Humanities, Chubu University*)
Masaki YUKI (*Graduate School of Letters Division of Human Sciences, Hokkaido University*) – *Discussant*
Takeshi HASHIMOTO (*Faculty of Humanities and Social Sciences, Shizuoka University*) – *Organizer, Chair*

Contemporary society faces continual expansion in various aspects. However, humans' innate psychological mechanisms have not been able to change so dramatically. Thus, relatively speaking, the range of the world that individuals can grasp becomes smaller as the world expands. The world appears more ambiguous and complex, and thus people may employ various tactics that prioritize adaptation only within the restricted range of the society that they can immediately understand. However, because these strategies are shortsighted and restrictive they may not be very useful in other contexts, and in fact may have various negative effects on broader society as a whole.

This article is a summary of conference workshop to introduce some provocative research projects associated with the above issues. Each presenter specifically discusses possibilities that some behavioral and psychological strategies that have been arising in the current society are actually maladaptive. First, Yuji Kanemasa presents his research findings regarding "self-discovery" among adolescents, which he refers to as "reflexive fixation on the self." Next, Toshihiko Soma develops a discussion about "perceived distinctiveness," the tendency of evaluating one's own romantic relationships as excessively positive. Third, Atsushi Oshio introduces research concerning the positive and negative effects of "dichotomous thinking" and "excessive positive thinking." Finally, Masaki Yuki discusses requirements for the theoretical and empirical examinations of the phenomena of social and psychological change, using a socio-ecological approach.

Keywords: reflexive fixation on self, perceived distinctiveness, dichotomous thinking, excessive positive thinking, socio-ecological approach.